

【第84回生涯教育講座】

呼吸器病学のパラダイムシフトと
呼吸器生活習慣病対策の重要性

いそ 儀 べ 部 たけし 威 かん 神 だ 田 ひびき 響
たお 峠 おか 岡 やす 康 ゆき 幸

キーワード：肺癌，慢性閉塞性肺疾患，呼吸器生活習慣病

要 旨

増加の一途をたどる肺癌は今世紀，呼吸器内科医，臨床腫瘍医の取り組むべき最重要課題の一つである。特にゲフィチニブなどの分子標的治療薬によって，より特異的，選択的で毒性の少ない治療が開発されつつあり，肺癌を個別化し慢性疾患として捉える日も近い。喫煙対策が非常に遅れているわが国において，2020年には慢性閉塞性肺疾患が死亡原因の第4位に位置することが予想されている。一方で，早期診断に必要なスパイロメトリーは普及せず，国民の本疾患の危険性の認識も不十分である。今後は禁煙と急増しつつある本疾患の啓発を行っていくことが，呼吸器内科医の重要な任務である。

はじめに

呼吸器疾患を年齢から分類すると，比較的若い年代から認められる気管支喘息，中年層から発症する睡眠時無呼吸症候群，特発性間質性肺炎，高齢になるにつれ増加する肺癌，慢性閉塞性肺疾患（以下COPD），全年齢で認められる肺炎に大別される（図1）。

昭和期の呼吸器病学は，感染症，なかでも肺結核と共に診断学，治療学の進歩をとげた。その変革期は1990年代に生じ，まず，増加の一途をた

どっていた肺癌が，1998年のがん死亡原因の第一位となった。また，入院患者の多くを占めたびまん性汎細気管支炎が，マクロライド少量長期投与という画期的な治療法によって，重症例と発症率が急速に低下した。また，吸入ステロイドの普及

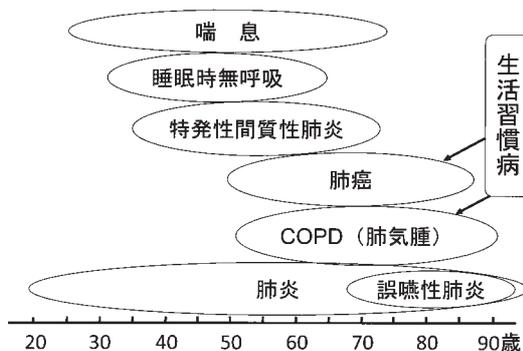


図1 呼吸器疾患の年齢分布

Takeshi ISOBE et al.

島根大学医学部内科学講座がん化学療法教育学
(呼吸器・化学療法内科)

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1